
第6章

木村武山コレクションの石器ほか調査報告

小林 公明

凡 例

1. 目的：属する文化または地域、時代を明らかにすること。
2. 経過
 - 2017年6月22日 種類別に仕分け
 - 2017年6月23日～9月15日 のべ18日 簡略的な実測図の作成
3. 総括表1枚 一覧表15枚
 - 図 B4版131枚 A3版10枚 写真20葉
4. 一覧表ならびに記述の順序は器種毎に、およそ実測図の作成の順に従った。
5. 石斧類にはすべて、整理番号のラベルを貼った。
6. 添付資料
 - 北中国先史文化編年表
 - 石斧の形式分類一覧表
 - 主要な石斧の形式分類図 7枚

1 収獲具 (10点)

中国で石刀、日本で石庖丁と称される穂刈具。1～8はいずれも似通った大きさ、形態の単孔長方形石庖丁。これらによく似た形式のものは、内蒙古中南部の廟子溝文化—阿善文化—老虎山文化にみられる。朱開溝文化には、3や6と同じように一側端にも刃を付けたものがある。さらに同様な大きさ、形態のものは河北や山西の龍山文化期にもみられる。また、遼西の建平水泉の夏家店下層文化期に、やや大きめだが形状のよく似たもの（ただし片刃）が見出される。以上から判断すれば、1～8は内蒙古中南部方面に由来する遺物であろう。文化期は定かにできない。

9は長大な単孔石庖丁。これほど大きくはないが、似通った形態の石庖丁が敖漢旗大甸子（夏家店下層文化）から出土している（『大甸子』科学出版社 1996）。ほか、吉林の汪清県百草溝（青銅器時代早期）にもそれと似たものが見出される（佟柱臣『中国新石器研究 下』巴蜀書社 1998）。したがって、9は夏家店下層文化期のものと考えられる。同文化じたいは、別に固有的な形態の石庖丁をもつのだが。10は、おそらく夏家店上層文化のもの。これは双孔の間隔がかなりあるが、双孔半月形石庖丁は同文化によく見られる。

2 すき (16点)

耕起具であるすきには鋤、耜、犁の字が当てられるが、それぞれ意味合いが異なるので、「すき」としておく。林西県白音長汗（『白音長汗』科学出版社 2004）や敖漢旗趙宝

溝（『敖漢趙宝溝』中国大百科全書出版社 1997）の発掘によって、興隆窪文化から趙宝溝文化の石すきの形態は明らかとなっている。紅山文化のそれについてはまとまった発掘例がないが、いくつかの形式は知られている（『中国新石器研究 下』）。1～4は、白音長汗二期乙類と区分された興隆窪文化から趙宝溝文化への移行期の石すきの特徴を具えている。5～9は趙宝溝文化の形式。10・11は紅山文化の形式である。

12は打製の大形品。これと似たすきは建平水泉（遼海文物学刊 1986-2）や牛河梁第十六地点（『牛河梁 中』文物出版社 2012）から出土している。どちらも夏家店下層文化の遺跡。したがって、同文化に属すと目される。13は磨製の大形品。これほど大きくはないが、近似する形態の石すきが遼東の本溪東崴子の出土品（青銅器時代早期）に見出される（『中国新石器研究 下』）。また、オルドスの朱開溝にもみられる（『朱開溝』文物出版社 2000）。こちらは夏代晩期とされる。ただし、どちらも両刃である点が本例と異なる。ともかく、それらと同時期のものであろう。14～16は同じ黒色岩の石すき類だが、所属不明。

3 鋤（7点）

日本の鋤に当たる石器を、中国では鏟とか鋤とよぶ。鏟はすきのように身の延長上に柄がつく浅耕具、鋤は身に対して直交する柄のつく中耕除草具をいう。ここでは、柄のつけ方は問題とせず、鋤としておく。打製の1と2は興隆窪文化のもの。これらと似た撥形の石鋤は敖漢旗興隆溝遺跡に特徴的である（考古 2000-9）。2のような大形品はみえないが、3～7は夏家店下層文化のもの。同文化の石鏟は建平水泉（前出）、北票豊下（考古 1976-3）、赤峰蜘蛛山（考古学報 1979-2）、赤峰東山咀（考古 1983-5）、牛河梁第十六地点（前出）などに類似品があり、その形態的諸特徴が明らかとなっている。

4 小鋤状器と鎌形器

それぞれ1点。所属不明。

5 槌と槌斧（8点）

1と2は槌、3～8は槌斧。みな夏家店上層文化に属す。中国では槌に錘つひの字を当てる。槌はたいてい採集品で、発掘品はごく稀。北京北郊の昌平県白浮村付近で発掘された西周早期燕国の木槨墓からの出土例くらいだろうか（考古 1976-4）。槌斧の出土例は少ない。赤峰夏家店上層（考古学報 1974-1）、赤峰蜘蛛山（前出）、建平県水泉（前出）、阜新平頂山（考古 1992-5）、遼寧西豊県東溝（考古 2011-5）などといった遺跡であるが、夏家店を除いてみな破損品。ただし、平頂山のものは魏營子文化に属し、東溝

のそれは戦国から前漢初期に下る。ちなみに紅山文化の石器の収蔵家、王冬力という人が著した『紅山石器』（華芸出版社 2007）にはこの種の石器がいくつか載っている。8は片方が槌でもう一方は鶴嘴。並外れて大きく、ずしりと重い。他に類例をみない。

6 斧 (344点)

340点余の斧の類いは、武山コレクションの石器の主体をなす。が、それらの帰属をみな明らかにすることはとても困難である。まず、常套手段として形態分類。大別しておよそ10類くらい。それらをさらに細別してみた。できるだけ特徴を限定することによって、所属する文化や地域を特定しようというわけである。また、石斧の二、三の形式をふくめ、先にみた槌や槌斧、農具類の構成が遼西から内蒙古東南部を中心とした遺物であること。さらに内蒙古中南部と遼東方面の要素もみられることから、中国の発掘報告もそれらの地帯と河北・山西の一部に当たってみた。なお、図上で石斧を比較するには、平面図と側面図（または縦断図）と横断図が必須である。中国の発掘報告はしばしば横断図を欠くので、比較できないことが多い。

I類 円柱状石斧 (図1)

一口でいえば円柱状石斧。分厚い太型で、横断面が円形ないし楕円形をなす。総じて敲製、刃部のみ磨製のものが多い。総数77点。A～Dの四通りに細分される。

A型 基端が狭くて（狭基）、弧形を呈す（円頂）。身の左右が弧形に膨らむ、いわゆる三味線胴。11点。敲製・刃部磨製がほとんど。1は天然礫に少し刃を研ぎ付けただけ。11も転石の形状をそのまま生かしている。

B型 基端が広く（広基）、なるい弧形を呈して厚み幅を有す。三味線胴。12点。敲製・刃部磨製が半数余。11は天然礫をほぼそのまま採る。また、半数近くが基端と刃部を槌のように使っている。本来の斧としての役割を終えた後の、二次的な利用である。このように転用されたものを、中国では「斧形器」と呼んだりする。

C型 Bと同じく広基で、胴体は長梯形に近い形状のもの。24点。やはり半数余が敲製・刃部磨製。基端や刃部を二次的に利用したものは15例に及ぶ。1～3は基端の縦断面が尖り気味である。

D型 基端の形状はB・C型と同じ。刃部が最大幅を有す。もしくは、最大幅と刃部幅が同等。30点。敲製・刃部磨製は12点、粗い磨製ないし局部磨製が9点、全面磨製が6点、不明3点となっている。刃線がきれいに整ったものが目立つ。この類は、本来もっと丈長であったものが半数を占める。研ぎ減り、もしくは破損後の再生使用である。また、基端と刃部を槌のように転用したものは三分の一弱。

I類に相当する石斧は、夏家店下層文化に見出される。牛河梁第十六地点ではA型3点、D型2点が知られる（前出）。それはA型の4とか6に似る。同地点は以前、三官甸子城子山と呼ばれていたが、B型の7や8に近いものが図示されている（考古 1986-6）。大甸子（前出）の2点は、D型に当たる。また、赤峰二道井子では2点が写真で紹介されている（考古 2010-8）。みるからにD型である。以上、いま知られる類品は多くないが、全体としてI類は夏家店下層文化の斧の形式だと考えて大過ないだろう。

この類の石斧は、遼東方面にも見出される。大連甘井子区双砬子^{そうだし}の一期文化では、16点の斧のうち7点がこの類らしい。4点が図示され、うち3点はそれぞれA・B・D型に相当する。残る1点は、むしろ方柱斧（Ⅲ類）とみられる。二期文化では、26点のうち4点らしいが、図示されるのは破損品1点。三期文化では、99点のうち18点らしい。2点が図示され、それぞれB型とD型相当。写真を見ると、敲製や粗い磨製のような（『双砬子与崗上』科学出版社 1996）。大連の郭家村上層は、だいたい双砬子一期に相当する。D型に当たる棒状斧が1点（考古学報 1984-3）。大連新金県单砬子は、双砬子二期文化ごろと目される。B型とD型に相当する石斧が各一点。B型の方は敲製であることが写真で明らか。またD型の方は見るからに本来もっと丈が長い（『貔子窩』東亜考古学会 昭4）。旅順羊頭窪^{ようとうわ}は、双砬子三期文化に相当する。B型が1点みえる（『羊頭窪』東亜考古学会 昭18）。これらは総じて客体的であり、およそ夏家店下層文化に並行する時期である。同文化から波及してきたものと考えられる。

大連甘井子区大嘴子^{だいしし}は一期から三期まであり、だいたい双砬子の一期から三期に相当する（『大嘴子』大連出版社 2000）。一期では1点、三期文化では40点弱の円柱斧が見出される。三期の石斧総数は280点。大多数の斧身は荒い磨製だという。多くは広基・円頂で、I類のC型やD型に相当する類いである。本来はもっと丈長だったと思しきものも、いくつかある。狭基も少しみられるが、末広がり。いわゆる三味線胴はない。

II類 丸縁扁平石斧（図2）

I類のような分厚い重量感はなく、総じて身幅が広い。側縁は丸い。それを丸縁^{まるぶち}と呼んでおこう。26点。多くは全面磨製だが、敲製のあと粗く磨ったものが5点、敲製のままで刃を研ぎ付けたものが3点ある。やや厚めなものと扁平なものに分かれる。

A型 厚さ3.5～2.5cmくらい。身幅と厚さの比は二対一ほどである。基端のつくりは狭基で円頂。7点。うち3点は刃部が最大幅。4は半割した天然礫に刃を研ぎ付けている。5も一部に礫の表皮が残る。

B型 扁平で広基。刃部が最大幅。15点。1と2は天然礫の形状をとどめる。7は片刃の鉋型（VI類C型）に似た形。

C型 片刃のもの。4点。1と2は幅広で丈が短く、3と4は幅狭で丈は長め。4の片面は礫の表皮。

Ⅱ類に該当する出土品を特定するのは、難しい。それでも赤峰紅山後（『赤峰紅山後』東亜考古学会 昭13）や赤峰西水泉（考古学報 1982-2）、牛河梁第五地点（『牛河梁 中』）、白音長汗（前出）でB型に相当する石斧を見出さう。紅山文化のものである。また克什克騰旗南台子では、A型に近い斧が認められる（『内蒙古文物考古文集2』中国大百科全書出版社 1997）。それも紅山文化。したがって、Ⅱ類のA・B型はおよそ紅山文化に属するのではないだろうか。片刃のC型は、紅山文化の片刃石斧に該当するものが見当たらない。

Ⅲ類 方柱状石斧（図3）

横断面が隅丸の方形または長方形を呈する方柱状石斧。広基で円頂。左右両辺は平行または長梯形。13点。敲製で刃部磨製のもの4点、局部磨製3点、粗い磨製2点、通常の磨製3点、不明1点。また、基端や刃部を槌のように二次利用したものが4点ほどある。

この種の方柱斧は、内蒙古中南部の老虎山文化から朱開溝文化に特徴的である。岱海沿岸の園子溝、老虎山、西白玉といった遺跡の石斧はみなこの形式である（『岱海考古（一）』科学出版社 2000）。総じて基端の作りが平面も側面も直線的であり、横断面もきちんとした胴張り長方形ないし隅丸方形をなす。また、三味線胴を呈するものも少ない。園子溝の報告文によれば、多くは細かな敲製で刃部のみ磨製のようなものである。それらのなかにいくつか、基端の作りがくずれて円味を帯びたものがある。Ⅲ類に近い。ただし厳密には、老虎山文化の方柱斧と同程度の断面形を有するのは1と2と12くらいであり、他はみな丸味がつく。ゆえに、Ⅲ類が老虎山文化そのものに属すと云うには躊躇する。

朱開溝の方柱斧は基端の作りがいっそう直線的で、横断面もきちんと規格的である。多くは敲製、刃部磨製（『朱開溝』前出）。なお、朱開溝で主体をなすのは横断面が楕円形を呈す円柱斧であり、基端の作りはやはり直線的である。

さきに8点の単孔長方形石庖丁を内蒙古中南部方面の遺物と推定したが、Ⅲ類の方柱斧も同方面に由来すると考えられる。

いっぽう、河北の灤南県東莊店では下の層から方柱斧、上の層から円柱斧が出土した。円柱斧はⅠ類B型に相当する。方柱斧は典型的な老虎山文化のものではない。新旧の二時期はあれ、出土遺物は夏家店下層文化の要素と中原の商文化の特徴を有するという（考古 1983-9）。同じく唐山古冶でも、円柱斧と方柱斧が併存した。円柱斧はⅠ類B型に相

当し、方柱斧も三味線胴を呈す。やはり出土遺物は前者とまったく同じ様相だという（考古 1984-9）。また、天津^{けい}蘆^{けい}の張家園でも夏家店下層文化期の方柱斧が出土した（考古 1984-8）。以上によって燕山の南においては、その時期に方柱斧と円柱斧の併存が明らかである。

基端の形状が老虎山文化のように直線的でない方柱斧は、遼東の青銅器時代早期にもみられる。本溪廟後山や東^{とう}崴^{あい}子、吉林の汪清県百草溝といった遺跡から出土している（椋柱臣『中国新石器研究 下』）。それらは、Ⅲ類と似通う。時期は、夏家店下層文化に並行する。また、双砬子の一期や三期（前出）、羊頭窪（前出）では円柱斧とともに客体的な在り方を示す。大連金州区^{ほうかい}望海^{かい}塢でも1点みられる（『羊頭窪』）。望海塢は、単砬子と同じく双砬子二期文化ころらしい。これらの写真をみると、双砬子一期の1点は敲製・刃部磨製、他は敲製痕が残る粗い磨製のようなものである。

大嘴子では、その三期文化に20点余の方柱斧が見出される（前出）。さきに円柱斧の項でふれたとおり、大多数の斧身は粗い磨製だという。写真をみると確かに敲製痕が残っている。横断面は概して、きちんとした隅丸長方形。が、Ⅲ類のように両面の張るものもいくつかある。基部は直線的でなく、円頂。両面は平行を保ち、最大幅は刃部にある。

こうしてみると、遼東の方柱斧は老虎山文化に由来し、夏家店下層文化並行期に波及してきたものと考えられよう。ただ、Ⅲ類がどの地域、文化に属するかは、いまのところ判断できない。

Ⅳ類 亜定角式石斧（図4）

両側縁は明確な稜線をなさぬが、側面を形成している類。側面が平らで、表裏両面との境がはっきりした稜線をなす形式を日本では定角式と称する（つぎのⅤ類）。この類は、いわば亜定角式である。側面は平らでなく、丸味を帯びている。それに、側面をなすと認定できるかどうか、曖昧なものも少なくない。その点で先のⅡ類と隣り合っている。多くは全面磨製。55点。五通りに細別。

A型 分厚くて（3cm以上）、身幅も広い。その点でⅢ類の方柱斧の幅を広げたよう。

広基で厚み幅を有す。両面はおおむね平ら。また、多くは刃部が最大幅となる。

12点。たいいてい全面磨製だが、側面に敲製痕が残ったりする。敲製も2点ある。

8～11は両面が張って、横断面が楕円形をなす。7は三味線胴を呈し、敲製でもあるからⅠ類B型に通ずる。12は未成品である。本来はもっと丈長であったものの再生品が5点。Ⅰ類D型と同率である。また、基端や刃部を二次利用したものが3点。これもⅠ類D型と同率。

B型 扁平幅広で、両面は概して平ら。刃部が最大幅となるもの。広基でたいいてい円

頂。A型を薄くした類といえる。19点。やはりたいい全面磨製だが、側面から基端面に敲製痕が残ったりする。敲製も1点ある。

C型 扁平幅広。両面が張り、横断面が凸レンズ形をなす類。B型と同じく刃部が最大幅、広基で円頂。7点。横断面の形状はV類と似通う。また、II類とも似る。全面磨製だが、5は粗い磨製。

D型 幅狭で狭基。刃部が最大幅となるもの。5点。横断面の形状はさまざま。みな全面磨製。

E型 幅狭で円頂。刃部が最大幅とならないもの。8点。横断面の形状はさまざま。1～4と8は三味線胴。8はやや幅広だが、こちらに入れておく。ふつうの磨製と粗い磨製とが半々。

F型 片刃のもの。4点。1と2は幅広、3と4は幅狭。

この類のうちA型とB型に相当する石斧は、遼東の青銅器時代早期に特徴的である。双砦子では、一期から三期文化までみられる（前出）。二期と三期では、この形式が主体を占める。ただし、総じて基端は度の弱い円頂で、直線的。わずかに両面が張る隅丸長方形の横断面も、かたちが整っている。それに8～9cm台の刃幅を有すものがある。写真をみると、敲製痕をとどめる粗い磨製である。これらの点は、やや異なる。同じく大嘴子でも一期から三期まで、ことに三期では200点近い数が発掘されている（前出）。双砦子と同じ形態で、大形品も少なくない。やはり粗い磨製。本来はもっと長かったと思しきものもいくつかある。

羊頭窪、望海埒、単砦子でも同様な形式の斧が出土している（前出）。羊頭窪でも、本来もっと長かったとみられるものがいくつかある。また羊頭窪の報告書では、輝緑岩の場合は全面敲製で一部をいくらかみがき、刃を研いでいる。凝灰質頁岩の場合は全面的にみがきあげ刃を研いでいる、と記される。これらの石斧はみな、双砦子の一期から三期文化に属する。以上の遺跡はI類の円柱斧とIII類の方柱斧の項で挙げたが、主体となるのはこちらの形式である。同様な石斧は、本溪の廟後山や東崴子でもみられる（前出）。

III類のA・B型とこれら遼東の形式との細かな差異は前記のとおりである。最も大きな違いは、磨きの度合いにある。羊頭窪では凝灰質頁岩は全面磨製だというのが、III類A・B型のなかにそのような石質はなさそうだ。とはいえ、粗い磨製だけでなく、ふつうの磨製も行われている。大嘴子では円柱斧も方柱斧もこの形式も、みな粗い磨製で敲製痕が残る。I類の円柱斧もほとんど敲製だった。それが、青銅器時代早期（夏家店下層文化期）の斧の製作法だった。伝統的な磨製の手抜きといえる。すると、III類A・B型は遼東のものよりやや古い段階に位置づけられ、地域も異なるのだろうか。

C型は断面形からしてV類の定角式に連なるようにもみえる。いっぽう、そのような

凸レンズ形の横断面はD型の2と4、E型の2・3・5・7に認められる。それらは全面磨製5点、粗磨製1点で、C型の場合と大差はない。E型には三味線胴を呈するものが5点あり、うち2点が2と3である。三味線胴という点に絞ってみるなら、それらはI類の円柱斧と同じく夏家店下層文化期に属するのだろうか。そうした連関から推せば、C・D・E型はおおよそ同文化期のものかもしれない。

やや前後するが、A型にはI類のD型やB型に符合する様態がみられた。それも夏家店下層文化期を示唆している。

V類 定角式石斧(図5)

平らな側面を有し、表裏両面との境が明瞭な稜線をなす。日本で定角式と呼ぶ石斧に類似するので、便宜的に援用しておく。平面形はおよそ梯形で、おしなべて身幅が広い。両面が張り、横断面は凸レンズ形の両端を截断したよう。20点。

これに相当する石斧は趙宝溝文化に特徴的であり、敖漢旗趙宝溝ではこの形式一色となっている(前出)。ほか敖漢旗小山(考古 1987-6)や林西県白音長汗(前出)なども同じである。白音長汗では、興隆窪から趙宝溝文化への移行期にもみられる。また、燕山の南側で趙宝溝文化に並行する上宅文化においても同様である。唐山遷西県の西寨(文物春秋 1992年増刊)や天津薊^{けい}県の青池(考古学報 2014-2)から多数、出土している。

この形式の石斧は、興隆窪文化に発現する。同文化は燕山の南にまで及んでおり、唐山遷西県の東寨(文物春秋 1992年増刊)ではこれ一色である。ほか西寨の一期(上宅文化への移行期)、青池の一期(興隆窪文化)と二期(上宅文化移行期)でも多数みられる。燕山の北では阜新査海で10点余が出土している(『査海』文物出版社 2012)。査海で主体をなすのは、扁平で身幅の広い短梯形の形式である。長さ10cm前後、刃部の幅6~7cm、厚さ2cm台。側面形は刃面の直上が最も厚く、基部に移るにしたがい厚みを減ずる。横断面はないが、興隆窪の同形式の斧の図によれば凸レンズ状の丸縁である(考古 1997-1)。10点余の定角式はそれらと同類。

ひとつの傾向として、興隆窪文化の査海では側面幅が2~4mmと狭い。東寨では5~8mmくらい。青池では4~7mmくらいで、中に10mmを越えるものもある。これに対して趙宝溝文化の趙宝溝では大体10mm以上、最も広いのは15mmある。上宅文化の青池では7~14mmくらいである。そうしてみると、側面幅が3~5mmの13・14、8・9、10・4は興隆窪文化に属するのかもしれない。それらを除く2・3・5~7・11・12・15・19・20はまず趙宝溝文化に属するものとみて間違いのないだろう。1は身幅が狭くて横断面も楕円形に近いが、似た形状のものは青池の一期や西寨に認められる。16~18は、ここにあげた遺跡の発掘報告ではみかけない形状なので、属するところは不明。

Ⅵ類 定角式片刃石斧（図6）

定角式の片刃石斧。中国では片刃の斧を鑄^{ほん}と称する。59点。半数は小形品である。七通りに細別。

A型 梯形をなすもの。13点。1～5は丈が長く身幅もある。7～14は小形品。

B型 基部が狭く、刃部に末広がりとなる形態。7点。基端と刃部の比はおよそ二対一。やはり大きめなものと小型品とがある。

C型 鉋の刃のような形のもの。18点。これも大形から小形まで三段階ある。

D型 長方形で細長いもの。12点。このうち10～12は分厚くて作りも粗い。

E型 B型と同様な形状にして細長いもの。3点。ひとつは小形品。

F型 基部の方が幅広で、刃部の方が狭い倒梯形。4点。

他に形態不詳の破損品が2点。

これらの半数を占める小形品は、いかにも規格的である。その長幅比を調べてみると、A型7点は0.48～0.67、C型13点は0.67～0.82、D型1～9は0.35～0.49の範囲に収まっている。すなわち長方形D型、梯形A型、鉋形C型はびたりと接続する関係にある。三つの形式が長幅比を棲み分けている。ゆえに、これらはみな同一文化の所産と考えるべきである。また、残るA型の大形品5点は0.51～0.64、C型の大形から中形品5点は0.65～0.82の範囲にある。これらも小形品の長幅比に合致するから、大小は問題とならない。

B型は形態的に前三者のごとく連続する関係から外れているし、長幅比も一定にまとまらない。が、6と7のような小形品の存在は、やはり同一文化に属することを示唆する。E型とF型についても、同じことが云えるだろう。

A型からD型に相当する石鑄は、遼東の青銅器時代早期に見出される。羊頭窪、望海塙、単砬子、双砬子、大嘴子などである（前出）。A・C・D型の長幅比もほぼ合致する。B型に相当するのは双砬子一期文化に1点、認められる。E型は望海塙、単砬子、大嘴子に散見される。F型も大嘴子と単砬子に各一点みられる。またそれらは殆どが全面磨製であるから、その点でも合致する。とはいえ、趣を異にする点もある。大嘴子や羊頭窪では、片刃とは反対の裏面が刃線に向かって大きく傾斜するものが目立つ。こちらで相当するのはA型の10、C型の1と15、E型の2くらいである。それに、小形品でも大嘴子や羊頭窪の方が10mmを越えて厚い。そうした差異はあるものの、全体としてこの類は遼東の青銅器時代早期に連なっていると目される。

まったく別な視点に立てば、A型の5の基端面のかたちは、後でみるⅨ類A型の短胴方柱斧のそれに近い。A型の10や11、C型の6、D型の3の基端面のかたちは、これも後で見るとⅧ類の有孔斧のそれに似通う。どちらも夏家店上層文化の斧である。基部が方

形の板状に作られたⅧ類は、全体として規格的である。このⅥ類で半数を占める小形品も規格的であって、そのことが互に通底する。さらに付け加えれば、Ⅷ類にも鉋の刃の形状に似るB型がある。6点のうち5点の長幅比は0.63～0.78である。それも近似する。そうしてみると、これら片刃斧は夏家店上層文化に属するかもしれない。年代測定値に従えば、双砵子三期文化や大嘴子三期文化は夏家店下層と上層文化の間に相当するから、大きな齟齬はない。

Ⅶ類 小形な両刃石斧

小形な両刃斧をまとめた。19点。四通りに分別。

A型 梯形ないし長方形のもので、Ⅵ類A型に相当し、長幅比も合致する。7点。5は両面中央が鑿^{しのぎ}状をなす。

B型 末広がりの形態でⅥ類B型と似るが、側縁は薄くて丸い。2点。

C型 鉋形で、Ⅵ類C型に相当。長幅比もほぼ合致。5点。ただし5は刃幅の方が上回る。

D型 細長くて、刃部が最小幅であるもの。5点。1は円柱斧。2と3は垂定角斧。4と5は定角式で鑿のよう。

これらのうちA型とC型は、Ⅵ類の定角式片刃斧と同一文化に帰属する。ちなみに、望海堦や双砵子でも小形な両刃斧がみられる。D型のうち1は円柱斧Ⅰ類に、2と3は垂定角式斧Ⅳ類に属すとみられる。

Ⅷ類 方板頭有孔石斧（図7）

基部が方形の板状に作られた石斧で、基端面は隅丸長方形をなす。基部を頭部とも云い換えることができるので、方板頭としておこう。方板状の基部と身の境に、たいてい孔が設けられる。多くは、身の側面が丸味をおびる定角式。全体として規格的な作りである。32点。三通りに分けられる。

A型 胴が長めな類。身幅は4cm以下。21点。1～10は両側辺が少し張る三味線胴気味。1と2は基部が左右に迫り出す。9・10は鑿のよう。11～16は両辺がほぼ平行ないしわずかに倒梯形。17と18はわずかに梯形で、刃部が最大幅となる。19・20は形状がややくずれて、孔の位置も高い。本来はもっと長い21は、孔の形状が異なる。

B型 幅広で胴が短めな類。5cm幅くらいで鉋の刃のよう。6点。

C型 大形品。5点。1～3は長身。4は幅広で、孔の位置がA型の19・20と同じ。5は刻み（鉋^{そが}と称す）を有す。形状とすればB型を大きくしたもので、長さ

幅の比率も合致する。孔の位置も同じ。

これらの類は夏家店上層文化に属する。ただし、発掘品はきわめて少ない。赤峰紅山後でA型が2例、石槨墓に副葬されていたくらいである（前出）。同報告書には、赤峰紅山の蒐集品として5点のA型石斧が掲載されている。それに、4点の有孔槌斧もみえる。有孔槌斧の出土例については先に記したとおりだが、この手の石斧の出土例は他に類例を知らない。佟柱臣は『中国新石器研究』のなかで、両者はともに夏家店上層文化の代表器物だと述べている。ちなみに、『紅山石器』にはこの手の有孔斧がいくつも載っている。A型の1や2の仲間もみえる。21は漏斗状に孔の外縁が広い。このような孔は夏家店下層文化の有孔斧に特徴的なので、そちらに属すかもしれない。

なお、紅山後では袋状青銅斧の石製鑄型が採集されており、有孔石斧の作ゆきはそれの形制を思わずと記される。佟柱臣も同様な見解をとる。そのとおりで、例えば北京北郊の昌平梨白浮村付近で発掘された西周早期燕国の木槨墓から出土した銅斧など、平面形も大きさもよく似ている（考古 1976-4 前出）。方板状の基部は袋状青銅斧とはあべこべに、木柄に設けられた柄穴ほぞあなに装着されたことだろう。事実、その部分が細かく敲打されてざらつくものが7例ある。しかし、そこの下手に接する孔の役割がわからない。紐擦れ等の痕跡も一切ない。ただ例外的に、C型の1と2には紐擦れ痕と思しき摩滅が認められる。

IX類 短胴方柱状石斧ほか（図8）

短胴の方柱斧とそれに準ずる特徴を有すものをまとめた。四種、21点。

A型 胴の短い方柱斧。基端面はだいたい長方形でほぼ平ら。両側面もほぼ平らである。11点。粗い磨製が5点、通常の磨製が4点、敲製2点となっている。3・4・7・12は程度の差はあれ、側面の半ばに段差がつくられる。また4と12は方柱でなく、扁平。7は横断面が扁橢円形。2の基端側両面が敲き減らされた様態は、Ⅷ類A型の有孔斧の場合と同じである。

B型 概して扁平。梯形で刃部が最大幅となる。両側縁は丸い。5点。粗い磨製3点、通常の磨製2点。4は、着柄部に浅い溝状敲打が加えられる。5は、A型の2と同じく基端側両面がいくぶん敲き減らされる。やはりⅧ類A型の場合と同じ。

C型 扁平で長梯形。3点。全面磨製で、定角式ないし亜定角。基端面の形状はⅧ類A型と同じである。2は基部側両面を薄くつくる。

D型 ずんぐりした柱状斧。2点。敲製と下半身が粗い磨製。身の半ばに段差が設けられている。

四種は形態を異にするが、いずれもⅧ類A型に通ずる様態を有す。それゆえ夏家店上

層文化に属すと考えられる。それに、A型の1とよく似た石斧が建平水泉から出土している（前出）。夏家店上層文化のものである。また、A型の8に近いものが阜新平頂山から出土している（考古 1992-5 前出）。報告では楔としているが。こちらは魏営子文化に属するという。A型の短胴方柱斧はもちろん、Ⅲ類のような方柱斧の末裔だろう。1～3は基端の作りが平面、側面ともに直線的であり、老虎山や朱開溝文化のそれに近い。なお、両辺が顕著な撫で肩に作られたA型の12は、その平面形が北票豊下から出土した石鏟によく似ている（前出）。12は夏家店下層文化にまで遡るかもしれない。

X類 有孔石斧

9点。1～3は玉製で、磨きの度合いや穿孔の状態が共通する。孔の位置も同じで、それはⅣ類A型の19・20やC型の4にみられた。また、2の形態は円柱斧のⅠ類A型と同じである。3はⅤ類D型の1の平面形に似る。4と5の孔の位置も同様に玉質。したがって、これらは一括りにできるかもしれない。おおよそ夏家店下層文化と上層文化の間（魏営子文化ほか相当）くらいのものか。6・7はこれといった手懸かりがない。8は、孔の様態からみて夏家店下層文化に属するだろう。孔の位置、大きさの酷似する石斧が建平水泉から出土している。9は、天然礫に刃付けした独特な形態。このような着想は、いかにも夏家店上層文化風である。

XI類 その他の石斧

3点。形態・大きさ・石質ともにほぼ同じで打製にして局部磨製。所属文化は不明。

XII類 通常でない大形石斧

ふつうではない大形石斧が二種類ある。一種は蛤刃の円柱斧4点。磨製。石質不明だが、大きさの割に軽すぎる。刃角は鈍く、使った形跡もない。もう一種は方柱斧6点。敲製で刃部磨製。刃形は直刃3点、なるいV字状にすぼまる刃3点。刃角は鋭いが、総じて使った痕跡はみられない。石質は頁岩と硬砂岩らしい。1点は基部に孔が設けられている。異様なのは、径5mmにも及ぶ粗大な敲製痕で、石で敲いたとは到底おもえない。双方とも夏家店下層文化期以降のものと思われるが、尋常でない点、いくつか疑問が残る。

まとめ

石斧の主要な形態は、まず、分厚くてごろんとしたものと幅広で平たいものにと大きく分けられた。ついで、前者は円柱状（Ⅰ類）と方柱状（Ⅲ類）が区別され、後者はお

よそ縁の丸いもの（Ⅱ類）と側面をなすもの（Ⅳ類）、明確な側面が稜線で画されるもの（Ⅴ類）とが類別された。これらのうち、Ⅴ類を除く四つの形態は、素材となる礫の形状と密接な関係があるだろう。現に、天然の礫に少し手を加えただけのものがいくつかあった。そこには、丸い石の槌でこつこつと素材を敲き減らして形を作り出す敲打製法が介在している。そこで、礫の形状の類縁に従って並べたのが、ⅠからⅣ類の順序であり、Ⅴ類をその後においた。けれど、それは文化史的な序列とは合わない。

収蔵品のなかで最も古いのは、興隆窪から趙宝溝文化の定角式石斧（Ⅴ類）。その4・10・14などは磨き切れない素材の打欠きの跡が残っている。素材の原形は知れないが、おそらく打ち割った石片の各所に打撃を加え、目指す形を作り出している（打製）。旧石器時代からの製作法である。そして両面と側縁を研磨するのだが、基端を敲打で仕上げているものも5例ほどみられる。つづいて、およそ紅山文化に属すと考えられる丸縁扁平石斧（Ⅱ類）。素材に扁平礫や半割した扁平礫がみられ、敲打製法が確立している。なお、紅山文化には、刃面の直上が最も厚くて基部に移るにしたがい厚みを減ずる円柱斧がある。が、収蔵品の中には見当たらない。

つぎの小河沿文化に特徴的なすらりとした円柱斧もみられず、夏家店下層文化の円柱斧（Ⅰ類）に移る。だんぜん敲打・刃部磨製である。ほぼ同じ頃か、やや先んじて老虎山文化系の方柱斧（Ⅲ類）が東漸したと考えられる。どちらも分厚い柱状礫が素材となる。方柱斧を平たくしたのが、遼東の双砬子三期文化で主体をなすような、亜定角式石斧（Ⅳ類）だと云えよう。A型の12は、素材となる扁平礫として申し分ない形状を具えている。片刃石斧は両刃の石斧とは別にすべきかもしれないが、ほとんどが定角式であることからⅥ類とした。亜定角式石斧（Ⅳ類）と同じく、遼東の双砬子文化のそれに連なるものと考えられる。ついで、これらに準ずる小形な両刃斧をⅦ類とした。なお、定角式の片刃石斧は興隆窪文化に発現している。夏家店上層文化の方板頭有孔石斧をⅧ類、短胴方柱斧ほかをⅨ類として、しまいの方に置いた。石斧の文化はこれらをもって終わる。

以上、整理の順序はあまり適切でないし、細かな分類と作図が前後したので、一覧表によって個々の石斧を検索するのが煩雑になってしまった。

7 加工具（16点）

磨り棒（3点） 長方形の磨りうすと一組になる製粉具。興隆窪文化から紅山文化まで、北中国では通有的にみられる。文化期は特定できない。

杵（5点） 柁柱臣著『中国新石器研究』をみると、黄河流域から北中国に分布し、時代はだいたい龍山文化から青銅器時代に属す。が、白音長汗では興隆窪文化から趙宝溝

文化への移行期に数点が登場し、紅山文化期にもある。少なくとも、北中国での出現は古い。1は典型的な杵。これと似通った形態のものが朱開溝から2点、出土している（前出）。うち1点は形状と大きさがこれに近い。2と3は磨り棒を転用したもの。使い込んだ磨り棒の端部がこのような形状になった例は、赤峰紅山後の報告書に数点みえる（前出）。いずれも破損品で、断面も著しく変形している。紅山文化ころの磨り棒を転用したものかもしれない。4は、恰も円柱斧Ⅰ類Aのよう。あるいは円柱斧と同時代ころのものか。5は、底面近くに浅い溝状回転痕がある。なにか機械仕掛けで加工したと思われるから、そう古いものではないだろう。

磨りうす（1点） 両面が皿状に磨られた小形品。磨り棒と組みになるものではない。性格不明。

磨り石と凹石（7点） 興隆窪文化から紅山文化まで北中国では通有的な石器だが、中国ではたいてい餅形器と称する。1と2は片面が真っ平に磨られている。3・4は両面が磨られている模様。5は全身がすべすべして、海浜石かもしれない。6と7は凹石。いずれも時期の特定はできない。ちなみに、3～7のような磨り石・凹石は日本の新石器時代のそれと似ている。

8 その他の石器（53点）

石鏃11点。白瑪瑙製の石刃11点。小形な石器5点。性格不明な有孔筩形器22点と双孔板状器1点。玉製品3点。

このうち白瑪瑙製の三稜翼鏃は、戦国時代の同形式の銅鏃を模倣したのだろう。白瑪瑙の他の3点も^{なかご}茎の作りが同じだから、やはり同期のものと考えられる。他にも1点、三稜鏃がある。やはり戦国時代の銅鏃と同じである。ほか、3点の磨製鏃についてはいまのところ不明。残る3点は基部に抉りを有し、うち1点は黒曜石製。黒曜石の鏃は北中国にもあるが、このような形の石鏃は類例を知らない。

9 骨角貝器（44点）

骨鏃32点。骨筩形器3点。紡錘車、有孔鹿角器、鹿角槌が各1点。有孔貝器3点。残片3点。

骨鏃は四稜・三稜・^{ひら}平・丸の四通りがあり、だいたい^{なかご}茎は次第に厚みを減じて末端はごく薄い。そのような特徴を有す骨鏃は、赤峰蜘蛛山から出土している（考古学報 1979-2）。丸い鏃2点が夏家店下層文化に、三稜と四稜の鏃7点は同上層文化に属す。赤峰紅山後でも、それらと同じ形式の骨鏃が石槨墓から出土した（『赤峰紅山後』昭13）。こちらも夏家店上層文化。ゆえにこれらも、同じ文化に属す。また紡錘車も、紅山後の石槨

墓からこれと同じ形式の土製品が出土している。ほか、蒐集遺物にもみえる。したがって、夏家店上層文化のものだろう。骨製の篋形器3点は、みな基部側に孔がある。1点は基端から縦に空けられている。おそらく青銅器時代の遺物だろう。これら以外については、いまのところ不明。

結 語

およそ明らかになったところでは、内蒙古東南部から遼西の石器が主体を占め、内蒙古中南部と遼東に連なる類も見出された。以下に整理しておきたい。

内蒙古東南部・遼西

興隆窪・趙宝溝・紅山文化で鋤、すき、定角斧（Ⅴ類）、丸縁扁平斧（Ⅱ類A・B型）、磨り棒、磨り石。

夏家店下層文化で鋤、円柱斧（Ⅰ類）、杵。

夏家店上層文化では槌、槌斧、方板頭有孔斧（Ⅷ類）、短胴方柱斧ほか（Ⅸ類）、骨鋸。

これらの中でⅧ類の有孔斧は、赤峰紅山後に際立ち、有孔槌斧もそれに準ずる。さらに骨鋸を加えることもできる。ゆえにそれらは、赤峰紅山あたりの採集品ではなかったかとの推測も成り立つ。

内蒙古中南部

廟子溝・阿善・老虎山文化にみられる形式の石庖丁と老虎山文化に特徴的な方柱斧（Ⅲ類）。また杵のひとつは、朱開溝文化のそれに近似する。方柱斧は、夏家店下層文化期ころに遼東まで波及する。燕山の南や遼東で、円柱斧と併存している。いまのところ、燕山の北側では方柱斧の出土例を見出せない。しかし燕南にある以上、燕北にもあるはずで、14点の方柱斧が燕北のものであろう可能性は否定できないだろう。

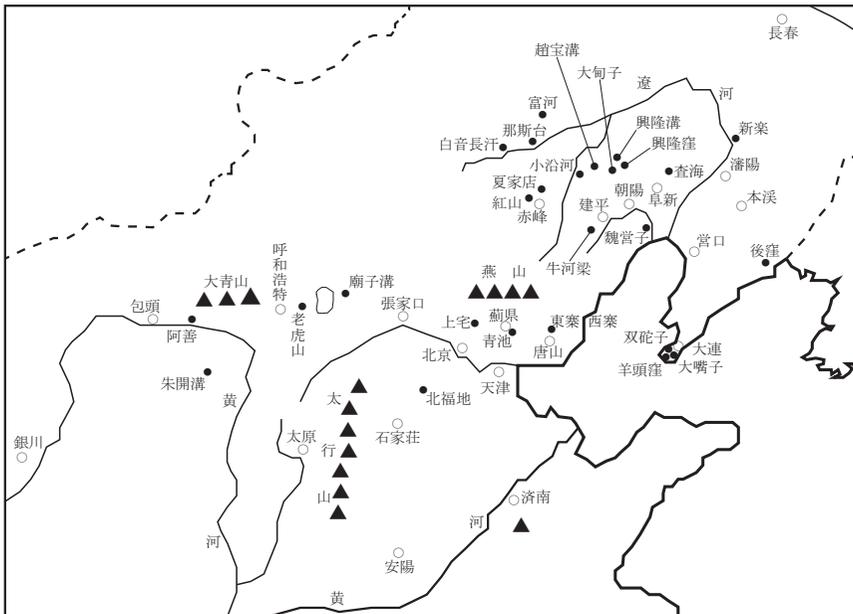
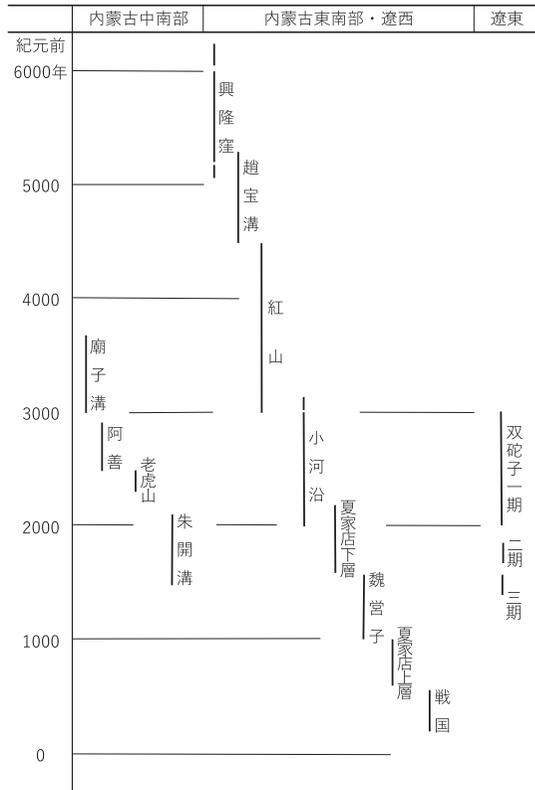
遼東

亜定角斧（Ⅳ類）と定角式片刃斧（Ⅵ類）、ならびに小形な定角式両刃斧（Ⅶ類）。これらに相当する石斧は、双砮子の一期から三期文化に特徴的である。しかし、いくつかの差異があって、遼東のものとは云い難い。他方、Ⅳ類のなかには夏家店下層文化の円柱斧（Ⅰ類）と同じ様態も認められた。Ⅵ類の規格性は、夏家店上層文化の有孔斧（Ⅷ類）のそれと通じ合う。これらも目下、遼西でまとまった出土例を見出せないが、可能性がないとは言い切れないだろう。年代測定値によれば、双砮子三期文化は夏家店下層と上層文化の間（魏営子文化ほか）に相当する。遼東との並行関係に大きなずれはない。ただし、一覧表では便宜的に「遼東系」とした。

しまいに、これらの石器が将来された背景には、昭和10年の東亜考古学会による赤峰紅山後の発掘があったと推察される。同学会は昭和8年に羊頭窪、3年に単砮子を発掘

している。この間の昭和7年には八幡一郎が、第一次蒙満学術調査研究団の一員として朝陽・承德・赤峰・翁牛特旗の一带を踏査した。日本人によるそうした遺跡調査の背景なしには、古美術品とはほど遠い石器類を将来することはありえないだろう。

北中国先史文化編年表(筆者作成)



主要遺跡位置図

(蘇秉琦著 張明曄訳『新探 中国文明の起源』(言叢社 2004年)を再トレースの上、加除筆)



图 1 石斧 I 類 (円柱状石斧)

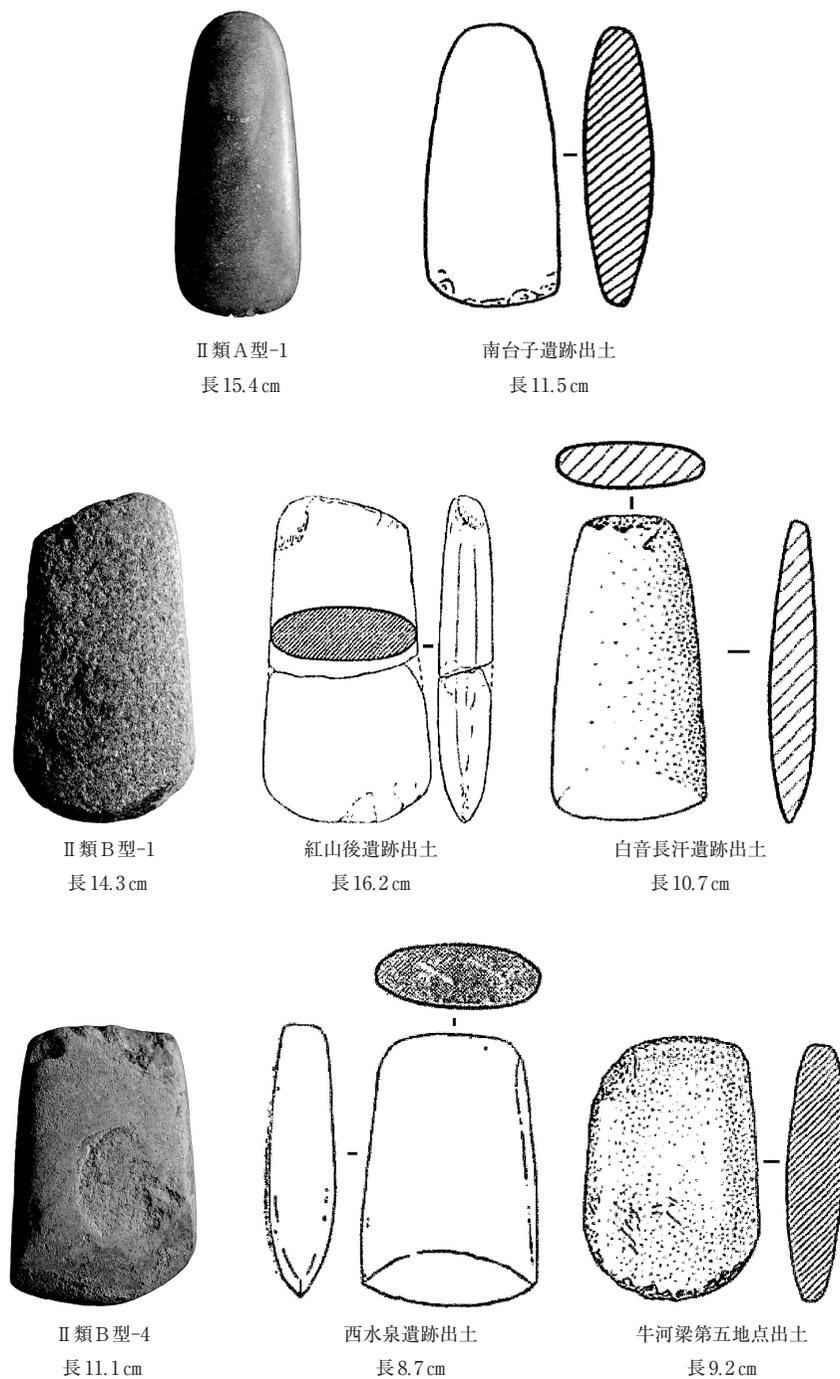


図2 石斧II類（丸縁扁平石斧）

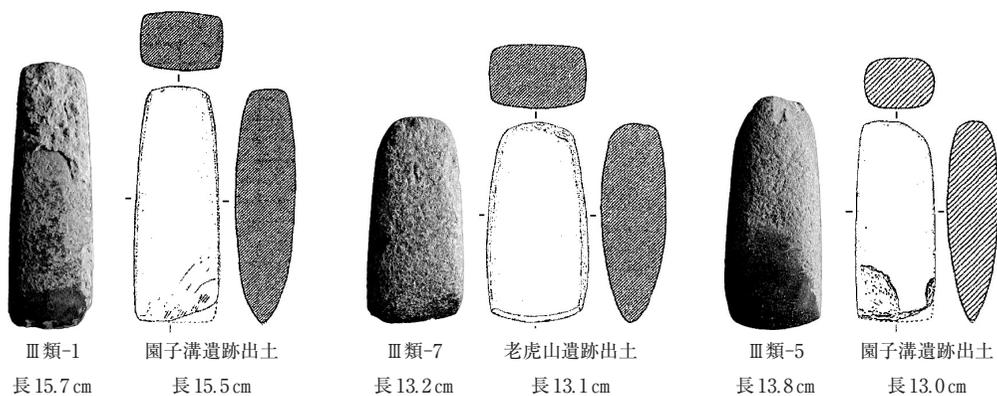


图3 石斧III類（方柱状石斧）

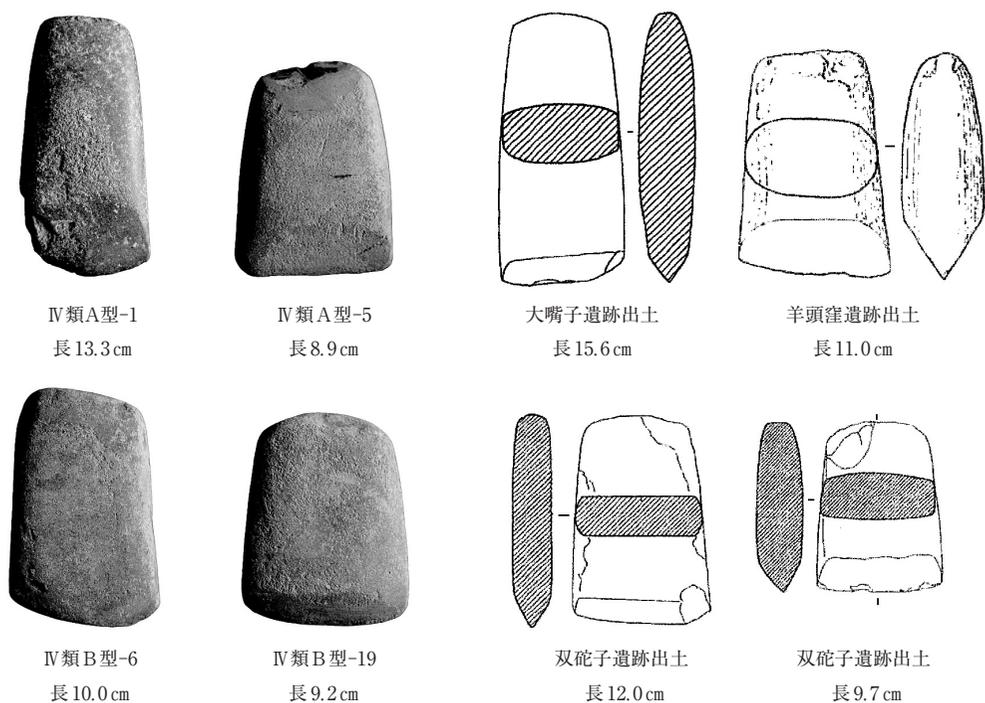


图4 石斧IV類（垂定角式石斧）

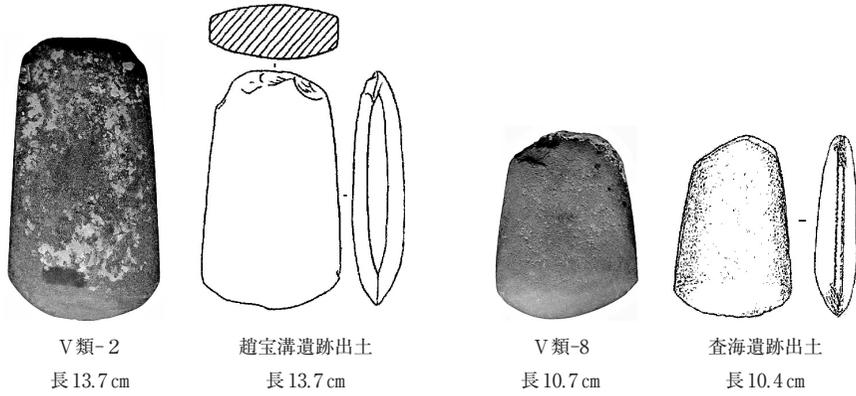


図5 石斧V類（定角式石斧）

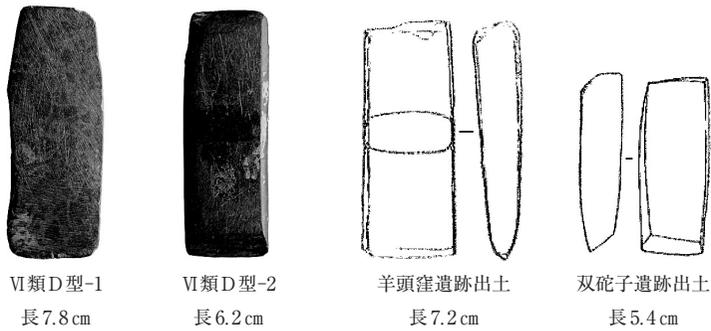
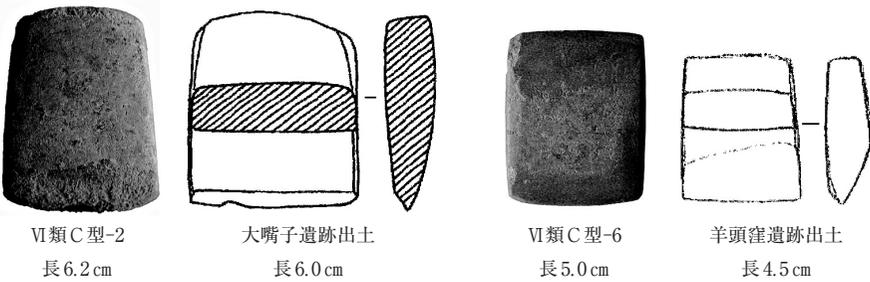
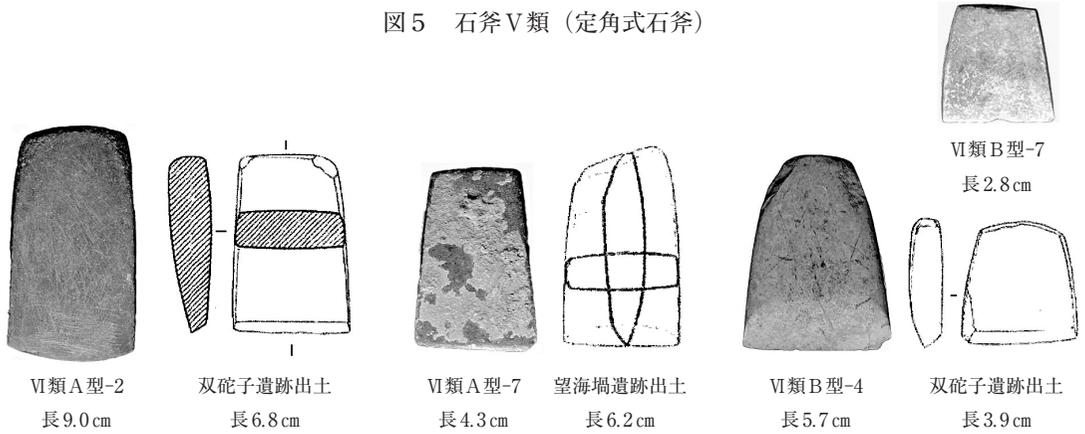
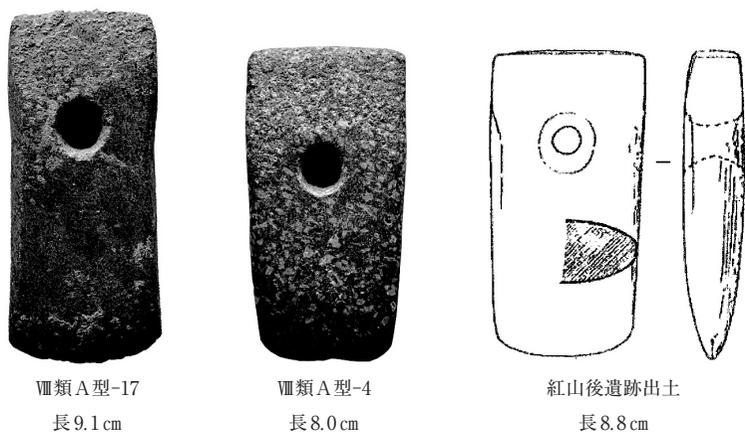


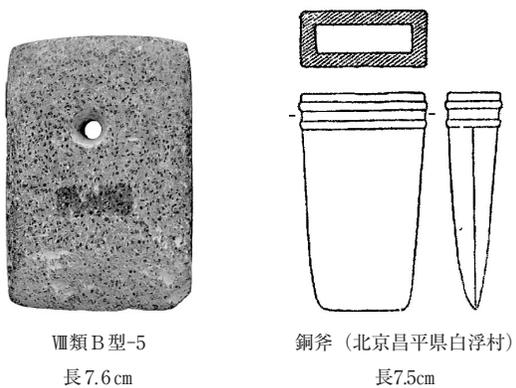
図6 石斧VI類（定角式片刃石斧）



Ⅷ類A型-17
長9.1 cm

Ⅷ類A型-4
長8.0 cm

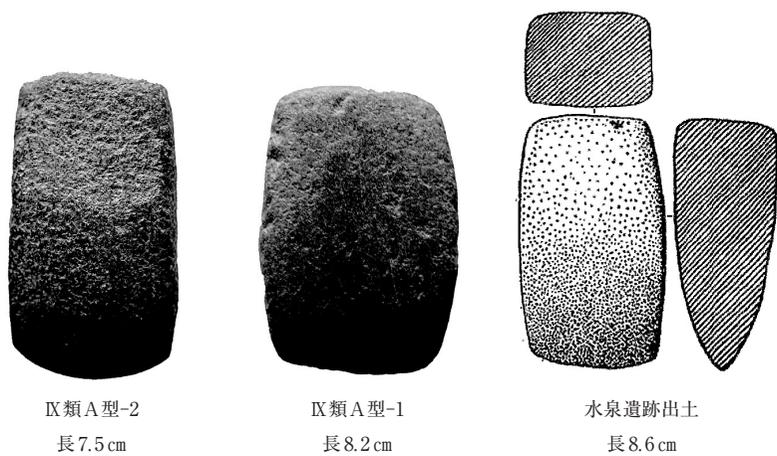
紅山後遺跡出土
長8.8 cm



Ⅷ類B型-5
長7.6 cm

銅斧 (北京昌平縣白浮村)
長7.5 cm

图7 石斧Ⅷ類 (方板頭有孔石斧)



Ⅸ類A型-2
長7.5 cm

Ⅸ類A型-1
長8.2 cm

水泉遺跡出土
長8.6 cm

图8 石斧Ⅸ類 (短胴方柱狀石斧)